

## 19 世紀フランスにおけるバレエ

### —女性向けモード誌と女流詩人

ジュディス・ゴーチエの視点に着目して—

お茶の水女子大学大学院

丹羽晶子

#### 1. 研究目的・研究方法

19 世紀フランスのバレエは、「女性について女性が演じる男性のための芸術」(Garafola, 1997:4) や、「(バレエの) 観客には少女や女性もいたが、歴史のこの時点でバレエが彼女たちにとって何を意味しているかについてはほとんど知られていない」(Steele, 2014:21) と指摘されている。本研究では、19 世紀フランスで刊行された女性向けモード誌 *La Sylphide: journal de modes, de littérature, de théâtres et de musique*(1840-1873) に掲載されたバレエ評及び 19 世紀の数少ない女流作家の 1 人である Judith Gautier (1845-1917) の自伝 *Le Collier des jours, souvenirs de ma vie* (1902) 『日々の連珠 私の人生の思い出』に残されたバレエへの言及に着目し、19 世紀フランスのバレエの女性による受容の一端についての検討を試みる。

#### 2. 結果と考察

##### 2-1. 女性に提示されたバレエ

1840-70 年代の女性向けモード誌 *La Sylphide* と一般紙 4 紙のバレエ評の比較分析から、前者においては官能性が排除されたバレエの提示が捉えられる。一方で 1840 年代の *La Sylphide* 誌には天上的で優雅さを体現した理想の女性としてのバレエダンサー像が見られるが、1870 年代の同誌記事には人間的で性的対象として見られる女性像への変化が捉えられる。これは、女子教育改革等によって生まれた、社会の中での女性の立場や役割への認識の変化、男性社会が求める女性像の変容等、女性を取り巻く環境の変化そのものを反映しているものと捉えられた (丹羽, 2019)。

##### 2-2. Judith Gautier によるバレエへの言及

###### i) Judith Gautier の生涯と自伝について

Judith は、女流作家として東洋趣味の文学作品を発表する他、新聞の美術評等も手掛けた人物である。父親は、Théophile Gautier (1811-1872) で、叔母は、オペラ座の花形ダンサーの Carlotta Grisi (1819-1899) である。自身の生涯を振り返った自伝 *Le Collier des jours* 『日々の連珠』(全 3 巻) は、フランス文学の「知られざる自伝」(吉川, 2012:14) とされる。本研究で分析を試みた自伝は、その第 1 巻(1902)であり、年代の詳細な記述は無いが、Judith の幼少期の 1850 年代前後と推察される。

###### ii) 叔母としての Carlotta Grisi

Judith は、舞台上で叔母が踊る様子を見たことはなかったが、オペラ座の花形ダンサーであった Carlotta が叔母であるだけでなく、自身の名付け親であることを非常に誇りとしていた。また、Carlotta の家で余暇を過ごすのが「最も退屈しなかった」と述べており、そこでは、Carlotta がバレエを練習する様子を見物し、「この上ない驚きと好奇心」を持って鑑賞したと述べている。

###### iii) 父親としての Théophile Gautier

Judith の母親は、Judith がバレエダンサーになることを望んでいた。これについて Judith は「父はこの計画には反対だった」とし、父親からは「私はあなたたちをダンサーにしないと完全に心に決めている」と言われたことを記している。つまり、T. Gautier は、理想のバレエや女性ダンサーについて主張してきた一方で、自分の娘には性的欲望の対象として男性に消費される一面のあった女性ダンサーになって欲しくないという考えを強く持っていたことが捉えられる。

###### iv) 女性視点で捉えたバレエ

Judith は、幼少期に母親の要望で、バレエクラスに通った。バレエシューズや稽古着に憧れを抱き、見様見真似でバレエを踊った様子を回想し、実際にバレエクラスに参加した際には、「それはとても楽しかった!」と記している。Judith の記述から、バレエを純粋に楽しみ、肯定的に捉えていたことが読み取れる。バレエダンサーになることが、女性が社会で高い地位に上る事のできる唯一の手段と信じていた母親や、Judith の踊る様子を熱心に見つめる乳母の描写からは、女性がバレエを性的対象として消費される俗なものという印象を抱いている様子は捉えられない。

#### 3. まとめ

本研究を通して、男性視点、女性視点それぞれから捉えたバレエ像が異なる様子が明らかとなった。*La Sylphide* 誌のバレエ評に見られる男性から女性に提示されたバレエは、19 世紀後半になるにつれて、憧れの対象から、性的に消費される対象へと変化していることが捉えられる。一方で、バレエを受容する女性の一人として本研究で着目した Judith の記述には、当時のバレエや女性ダンサーを憧れの対象と捉える様が確認され、バレエダンサーという職業についても、男女でその捉え方が異なっていることが浮かび上がった。当時のバレエは男性のための芸術だったと指摘されているが、当時の女性らはまた別の捉え方をしていた可能性がある。19 世紀を通して、バレエや女性ダンサーを肯定的に捉える女性たちの姿勢が示唆された。